

中学校英語スピーキングテスト結果の令和9年度都立高校入試への活用中止に関する陳情

(文教委員会付託)

受 理 番 号 第 1 1 0 号

受理年月日 令和8年7月24日

付託年月日 令和8年9月30日

陳 情 者

陳 情 原 文 東京都教育委員会（以下都教委）は民間業者と協定を結び、令和4年度から全公立中学3年生を対象に中学校英語スピーキングテスト（E S A T－J）を実施し、その結果を都立高校入試の合否判定に活用してきました。これには多くの問題点があることが専門家、教員、保護者等から指摘されていますが、都教委はそれに応えようとせず、さらに令和5年度から、新たに1・2年生でもスピーキングテストが各学校を会場に実施されています。

1 透明性・公平性・公正性の観点がなく、当事者への負担が大きいテスト

E S A T－J 実施については初年度より、制度と運営の面で問題があとをたちません。

- ① 解答に影響する音漏れがあること
- ② 高すぎる平均点、日常の評価との乖離がもたらす採点制度への不信
- ③ W e b 登録の煩雑さから保護者の登録支援や膨大な確認作業でかかる担当教員への負荷
- ④ 前後半で同一問題を使用するシステム、試験問題の配布ミスなど当日運営の不備
- ⑤ 不受験者への得点付与

等が問題となりました。

特に試験監督の資質、研修不足は多くの再受験を生むことになり、問題です。解答音声を録音するタブレットの不具合や、試験監督の不手際から、本人には何の落ち度もない中、後日、再受験を余儀なくされた受験生は、令和7年度も91名にのぼりました。試験監督者の数が足りず、当日実施直前まで試験監督者の募集が出ており、研修・準備が不十分なまま実施されたことは担当業者が変わっても一層顕著です。

また、不受験者には、学力検査の得点が同程度の受験生（前後10名程度）のE S A T－J 結果平均から見込み点が与えられましたが、その妥当性を示す統計的根

(裏面に続く)

抛はありません。そして、不受験者本人に何点付与されたのか、本人が知る術はありません。このような不透明さを含む制度をもつE S A T－Jを入試判定に使うことには無理があり、受験者である生徒たちに英語教育、高校入試、公教育への不信感をもたせることは避けられません。

2 テストによる動機付けではなく授業の質の向上を、英語教員の確保など教育環境の整備を

E S A T－Jは「話す力の向上」「グローバル人材の育成」という目標の下、実施されていますが、テストによる動機付けだけでは、学習効果は生まれません。むしろ授業の中で教師、仲間との人間的な関わりをもち、話す内容を豊かにしていくことで、ことばの力は向上するということは多くの教師たちが実感していることです。すべての生徒が外国語の力をつけ、自己を確立し、多文化共生の都市・東京で、コミュニティのより良い担い手となれるよう、指導法の研究や、教育条件の整備に税金を使うべきです。E S A T－Jの経費については、令和5年度から6年間で合計約210億円と見込まれています。これだけの予算があれば、不足している英語科教員の確保、中学3年生までの35人学級の即時実現が可能となり、英語を話す力の育成にも十分効果をもたらします。いずれも、受験生本人、保護者、教員の声をまず聴くべきです。

つきましては、下記のとおり陳情いたします。

記

- 1 E S A T－J申し込み、受験等に関わった教職員、生徒、保護者に向けて、受験教室環境、試験運営や事前・当日の困りごとなどについて「実施状況調査」を行い、結果を公表してください。
- 2 東京都教育委員会に中学校英語スピーキングテスト（E S A T－J）結果の令和9年度都立高校入試への活用を中止するよう意見書を提出してください。